

子どもたちの中の〈自分〉

宮里 暁美

私は、今、四歳児十四人の担任をしている。

一人一人の子どもたちは、みんな〈自分〉をもっている。でこぼこだらけの〈自分〉だけで、まるで掘り出したばかりの原石のように、輝いている。素敵なことだと思つづくと思う。

私は、そんな子どもたちの姿に出会い、笑ったり感心したり、考えさせられたり……。そして、何より一緒に歩むことのできる幸せを思っている。

*

「もう、イヤ！」と言って寝てしまったA子

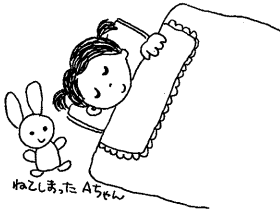
片付けの頃になると、ポーツとして、一人の動きをしやすいA子。そのあげくこの日は、他の子が拭き掃除をして濡れた床で二回もツルリとすべってしまい、とうとう、「も

うイヤ、もうー」といって泣き出した。そして、「上（保健室）で寝てくる」と言う。今朝早く起きたから寝たいのだと言う。

私が、保育室のじゅうたんのコーナーに、ままごとの布団を借りてきて敷くと、そこにすっぽりと入り、寝入りはしないけれど、とても穏やかな顔でA子は目をつぶった。

しばらくしてそこへ、R子がやってきて、A子のことを不思議そうに見ているので、「Aちゃん寝ているのよ」と、小声で教えると、枕元にいろいろなおもちゃを届け始める。

そのうち、それが遊びのように



なって、「おうちごっこしているの」とA子も言い、元気に遊び始める。（七月）

いい事もあれば、イヤになってしまう事もある。今まで家でのんびりと自分のペースで遊んできたA子にとって、幼稚園は、刺激が多い分疲れてしまうところなのかもしれない。

「もう、イヤ！」という気分のA子を、受けとめつつ、取りあえずじゅうたんのコーナーに布団を敷いてみたら、そこにすっぽりと潜り込んで目をつぶってしまったA子。その姿からは、私をそっとしておいて！ という声が聞こえるようだった。

そこへ、R子がやってきて不思議そうにA子を見て、そして、事情がわかると、まるで、病氣見舞いのようにして枕元に人形を並べたことで、いつものまにか楽しい遊びになり、A子は元氣を取り戻していった。

元気な子もいれば、元気じゃない子もいる。もういやっ／＼と、叫びたいことは誰にでもある。そんな時は、そんな気持ちのままでもいいんだな。元気ないよ、ねむいんだーとねていけば、どうしたのと心配してくる子がいて、また、新しいドラマがそこから始まる。

幼稚園という場を舞台として、子どもたちがあるのままに暮らしていることが一番ノ、という思いを、私は、A子とR子の姿から、強く思った。

水着を三つ持ってきたT子

急に暑くなった日、前庭にビニールプールを出す。パンツ一つになって歓声をあげて水遊びを始めた友達を、M子とT子は、(パンツなんてイヤだなー)という顔で見ている。それでも、一度だけ私と一緒に「足だけ入ろう。キャッ、キャッ」と中に入る。M子

達がパンツではイヤだと思っているよ
うなので、
「今度水着
持っておいで
よ」と声をか
ける。

さて、次の日。T子は、水着を持ってきた。しかも三つも。

お昼すぎになり、ぐんぐん暑くなってきたので、ビニールプールを出すと、さっそく水着を持ってきて、自分がつける。それから、他の子に「ねえ、水着着る？」ときく。友達が代わる代わる自分の持ってきた水着を着るのをうれしそうに見ている。

(六月)



この日の帰り、T子の母親に事情を聞くと、「水着を持っていくと言って、お姉ちゃんにも頼んで借りていたんですよ」と、教えてくれた。

子どもたちは、幼稚園と家庭との間を行ったり来たりしながら生活している。そのことに意味がある、と思うようになってから、私は、よく子どもたちの家でのことを聞いたり、また、自分の家でのことを話したりするようになった。

自分の家のことを子どもが語る時、子どもたちはとてもしっかりと見て見える。一人で立っているなという感じがする。

だから、大事なお便りや、全員に徹底するお知らせは、保護者に向けてのお便り等で知らせるけれどもっと個別の話等は、子どもに直接話すようにしている。この時の、「今度水着持っておいで」も、そんな一言だった。まだ水遊びは始まりの時期でもあるし、その内に持ってくれば、という思いの中で出

た一言だった。

その一言を受けて、お姉ちゃんにまで借りて水着を三つも持ってきたT子の行動力に私は驚いた。と同時に、とてもうれしくなった。入園して三か月、自分のやりたいことを、自分のやりたいやり方で、心ゆくまで楽しんでほしいなあという思いで過ぎてきた、一つの成果のようにも思えた。

それにしても、水着を三つ持ってきて、「着たい人」と希望を取り、いろいろな人が着るのを喜んでいるT子を見て、こういうことをT子はやりたかったんだな、一つの遊びのイメージなんだなと思つた。それは、学校のプール活動のイメージからははるかに遠く、家庭での水遊びのイメージに果てしなく近い。

「オレのハサミ、使ってみな」と言うS男

私とT男が、ビニールテープを切って、丸

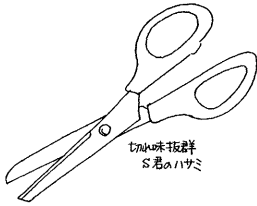
めたボール紙に張りつけていると、S男とK男が戸口に立って「僕たち屋上でサッカーやってくるよ」と言う。

「いいねえ。先生もあとでいれてね」と答えると、「先生キーパーね」と言う。

運動会で使う物なので作り終えてしまいたいと思って私がやり続けていると、「だったら、オレも作ってくよ」と、S男もビニールテープの張り付けを始める。

ちようにどいい長さにテープを切るためにハサミを取ってきた

S男が、「オレのハサミは、みんなのとちよつと違うんだなあ。よく切れるしくつついてこないんだ。いい



ハサミなんだ」と言う。確かにいい切れ味だなあ、と私が見ていると「ほら先生、使ってみなよ」とハサミを渡す。

シャキッという切れ味で、「本当だ、いいね」と私が言うと、S男は満足そうにうなずいている。
(十月)

屋上のサッカー場で、思い切りボールを蹴り、それを私がバシバシ受けとめるというサッカーごっこを数日来楽しんでいて、S男の「サッカーやってくるね」の一言の裏には、「一緒にやろうよ」という誘いがあった。

S男のそんなところが、なんだか可愛いなあ、と思ひ、もう少ししたら私も行くねと答えると、「それなら、僕もちよつと(先生の)手伝いをするよ」ときた。

本当にS男って可愛いなあ、と思っていると、今

度は、自分のハサミがどんなに切れ味抜群なのかという話になった。そして、ただ聞いているだけでなく、実際に使ってみればよくわかるよと、私にそのハサミを渡したのである。

切れ味抜群のS男のハサミを使ってみる私の手もとを、S男はさりげなく見ていて、「いいねえ」と私が認めると、うなずくのだった。

S男は、少し照れながら、でも自分らしいやり方で、いつも自分を表している。

風車を紙皿で作って遊んだ時にも、彼は、ひとしきり走りまわって回した後、言ったものだ。

「オレの風車、あとで回るよ」

ピューッとスピードを出して走っている間は回らなくて、急停車するとその後、手もとでクルクルと回る様子をとらえて、彼は、「あとで回る」と言ったのだった。

自分の気づいたことを、自分の言い方で表してい

るS男なんだなと思う。

*

自分から行動する、自分に感じたことや思ったことを表現する、友達とかかわる等、幼児教育の中でよく出てくる言葉たち。言葉だけを聞くと、何かとてもすごいことのように受け取れてしまう。

けれど、実は、「水着を三つ持ってくる」行動や「俺のハサミはよく切れる」と言うこと、「寝ている友達の枕元に人形を届けること」といった一つ一つのことが、それらの言葉の具体的姿なのである。

一人一人のありのままの姿、その底に流れる、確固たるその子らしさに触れ、その子らしさを愛しながら、毎日を過ごしていきたいと思っている。

(文京区立第一幼稚園)